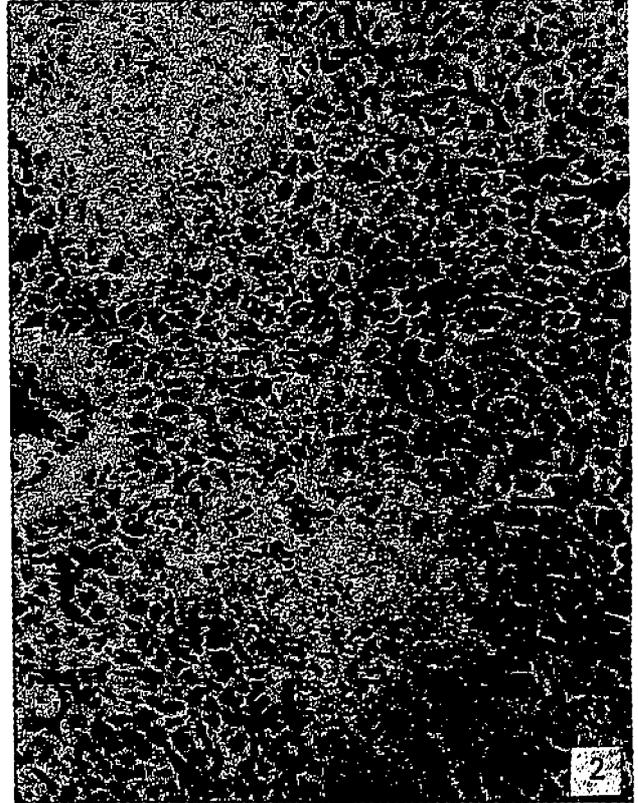
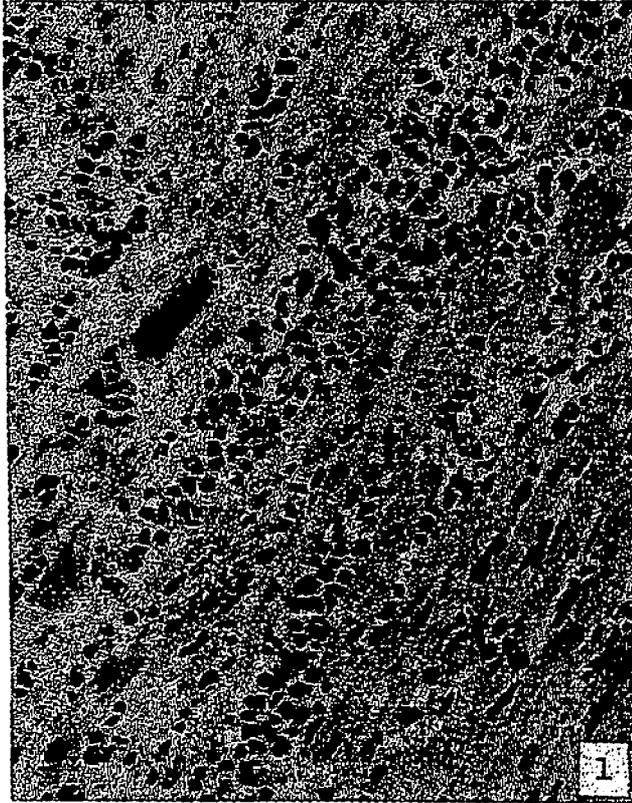


アカカンガルーの心臓および肝臓

帯広畜産大学家畜病理学教室出題 第23回獣医病理学研修会標本No.395



動物：アカカンガルー、雌、10ヶ月。

稟告ならびに臨床的事項：1981年9月30日に、推定年齢2～3才の雌3頭および雄3頭、計6頭のアカカンガルーがシドニー市よりO動物園に寄贈された。その後、1981年末に1頭の子を出産し、さらに続けて4頭の子が生まれた。最初に生れた子は翌年10月20日頃から右後肢の異常および肺炎の疑いがあったので抗生剤を用いて治療を行ったが好転せず同月30日に斃死した(提出材料)。

肉眼所見：死後直ちに担当獣医師により解剖に付され、肺のうっ血水腫および肝臓の高度のうっ血が主な所見であった。

組織所見：送付されて来た肝臓、脾臓、腎臓、心臓およびリンパ節について組織学的検索を行った。心臓では中心部に壊死を伴う細胞反応の強い比較的大きな病巣のほかに、心筋線維間に軽い細胞反応を伴った病巣が散在していた。浸潤細胞は若いリンパ系の細胞が主体をなし、比較的大きな病巣にはトキソプラズマのシスト(trophozoite)が心筋線維中に認められた(写真1, ×250)。また、このようなシストは軽度の細胞反応を伴うかある

いは反応なしに心筋線維中に稀に見出すことができた。肝臓では切片全般に亘って新鮮な多発性の壊死巣が認められた(写真2, ×160)。心臓で認められたようなシストはみられなかったが、極く稀に極めて小さく且つ新鮮な壊死巣にトキソ虫体の集団を認めることができた。肺は高度のうっ血水腫のほかに反応を欠くシストの存在が稀に認められた。その他の臓器には著変を認めなかった。

国内におけるカンガルーのトキソプラズマ症については鹿児島大の報告(第34回日本獣医学会)がある。それはオーストラリア産の2才のカンガルーで、肺および肝臓のうっ血が強く、組織学的に肺および脳に散在性にシスト、心筋に多数のシストをもった例であった。今回の例も心臓の変化は極めて著明であった。一方、肝臓の病巣はシストの存在を確認することは困難であったが、豚の自然例あるいは豚やマウスの接種例の肝病変と同様に極めて特徴的であった。

組織診断：カンガルーのトキソプラズマ症。